

帰りました。八月二十日でした。

昭和二十一年三月に結婚、現在一男三女の親として農業に励んでいます。

### 北滿勤務について

山梨県 小林 要吉

私は大正七（一九一八）年二月一日、山梨県北巨摩郡葦崎町水神に出生、昭和八（一九三三）年三月、葦崎小学校高等科を卒業した。書き方を得意とし成績は上位でした。

昭和十三年、徴兵検査は甲種合格で、昭和十四年一月入営となり、入営する者二十人を代表して挨拶をした。大阪で検査を受け数日して大阪港を出て大連港、奉天（瀋陽）、新京（長春）を経て琿琿へ着く。二月のこととて寒く、便所の時だけ甲板に出る。

一部隊は満州国黒河省第六国境守備隊第二中隊（中川隊）に入隊。私は速射砲隊に配属され、砲の口径は一七〇ミリ、五人で一門で三人で牽引する。時に馬で引く場合もある。ノモンハン事件で「ソ軍」の戦車に苦しめられたことから、速射砲

隊を設けたようです。

内務班の生活は朝六時起床、点呼、三十分の銃剣術の稽古、教練、演習、各種当番等で、午後九時に消灯である。ビンタは時には喰らったが予想していたより少なく、と言っても要領の悪い初年兵は度々やられた。やられる者は決まっている。

冬の水汲み当番は大変だ。零下二〇数度となり、井戸の水汲み出しロー・五メートルもあつたものが、汲み出す水がこぼれて井戸の汲み出し口に凍りつき、次第に口は小さくなり、四〇センチ位になつてしまう。汲み出した水は側の大釜に入れてお湯にする。気の強いお湯当番がいて、お湯をバケツに入れてくれる。零下三〇度位はザラにある。

営庭には温度を示す旗竿が立っていて、青旗は零下五度、赤旗は零下一〇度、赤一つ青一つで零下五度と分かる。

昭和十四年七月、一期の検閲が終わり一等兵に進級する。満州の春は遅く、五月頃に木の芽が吹

く、七月は夏で暑く四〇度にも達する。満人は西瓜、トマト、大豆、玉蜀黍、馬鈴薯、蕪、葱の類も多く栽培するようだ。土地は平坦、見渡す限り山と言つても丘程度で、高いと言つても百メートル位。日の出と日没の太陽の直径は一メートルもあるか。夕日は真つ赤でゆらゆらと揺れ動くような感じで地平線に沈む。日中の太陽は内地と変わることなく全く同じ。

昭和十五年一月、初年兵教育の助手となる。同年、演習と言うも討伐作戦あり。余りにも奇遇であるが、私より九歳上の実兄の憲治が、兵隊で瓊瑣にいたのでこないかとの連絡があり駅で会つた。広い満州、北満、しかも黒竜江西岸瓊瑣で会うとは。演習は孫呉、チチハルに至る広汎な地域、帰営は来た道と違う所を通つて第二中隊に帰る。

第六国境守備隊は第一中隊から第八中隊まで瓊瑣に駐屯し、第九中隊、第十中隊は朝水に駐屯。朝水は瓊瑣の西北一五キロ位にありました。思い出しました、速射砲は九四式三七ミリ弾で、戦車

の装甲三〇ミリ厚さを撃ち抜くと聞いた。また九四式速射砲には眼鏡が付いていました。

昭和十六年暗号手となり、司令部勤務。六密暗号解読書により首引きで解読に励み、解読の上、上司に提出する。ゲーペーウ暗号手を狙い、暗号書所持せる者を確保せば多額の懸賞金かけられたとの噂しきり。そう暗号書が持ち出せる訳がなく、番号が付られ誰が何号をもって解読にあたるかが記帳され、使用後はまた返納が記録されるからだ。

昭和十六年七月、関特演（関東軍特種演習）あり、完全軍装、実弾携行で瓊瑛から南一〇〇キロの孫呉に至る。四〇度もあるう酷熱、トマト畑や西瓜畑で喉の渴きをいやす。渡河演習も実施された。第四軍司令官は後宮淳で、瓊瑛に司令部があった。文献によると関特演の時の第四軍司令官は鷺津鉦平中將だであったが我々兵には分からぬこと。

黒竜江南岸に監視哨あり「ソ軍」陣地や兵の動

きを監視し、その記録を記し、監視長に報告する。倍率五〇、レンズの径二五センチ、長さ一・五メートル、通常二〇倍で見える。千メートルも離れているのに黒竜江北岸の「ソ軍」の兵舎の庭で餌を捨う雀もはつきり分かる。精巧なものだ。

黒竜江の河幅千メートル、凍結すれば三メートルの厚さで、戦車の通過もできる。氷の厚さの測定も監視哨勤務の仕事である。

黒竜江には鮭とも鯉ともつかぬ魚が獲れ、釣り上げると三、四回氷の上で跳ねるが、それで凍って仕舞いに動かなくなる。氷に入れ炊事に渡す。氷に入れるのだから二十四や三十四は獲れる。

監視哨の兵員は五十人で三カ月交替である。冬期には銃の鉄部に触れぬよう、頬に注意する。防寒帽の垂れ紐を結ぶようにともいう。兵の宿舎は厚い煉瓦造り、ペーチカで温める。石炭が燃料で、焚き付けは白樺の木、油気もありすぐ着火す。時々酒をくれるが氷のまま飯盒または食器で受け解凍して飲む。狼が多く生息し、夜の遠吠えを聞

く。ノロ鹿が餌食、ノロ鹿も多く生息するので狼も多いわけですね。

軍隊生活も時につらいこともあったが、概して平穩で、事務室勤務が多く、洋服仕立ての技があり「公用腕章」をつけて外出する。どんな字か知らないがシーカンズに将校の独立官舎が三十棟か四十棟あり、部隊長以下将校は乗馬で部隊に通う。厩あり、飼育、手入れ、繋留していた。

営外居住は将校のみならず准士官、曹長（妻帯者）もいるから相当数である。子供もいる。部隊から四キロ位の所と憶えていたが、今考えるとそんなに部隊から離れていては部隊への行き帰りも大変だし、部隊に緊急事態が生じても少し離れすぎることあり、二キロ位かとも思う。

私は高小卒業後、兄憲治が甲府市下連雀三丁目洋服屋をしており、そこで洋服仕立ての仕事をしていました。当時既製服はあまりなく、仕立てがほとんどでした。軍隊にも色々の職業の人もい

ましたが、洋服職人は皆無と言う程でしたから、将校さんの奥様方に重宝がられ、将校の服は個人持ちですから生地をいただいて洋服屋が仕立てるのです。シーカンズに洋服屋がないため私が仕立てていました。公用で隊を出て作るのです。他に子供服やカーテンを縫ったりしました。

仕事を終えて隊に帰るのですが、必ずと言うほど煙草を買いなさいと錢を包んでくれます。それが二円、五円、拾円と多額なので金はあり余り、戦友の実家が困ると言われ、拾円を渡して内地に送り、大変感謝されたこともあります。言葉通り芸は身を助くとはこの事だと思いました。

私は第二中隊で初年兵中成績四位以下になったことなく、いつも一選抜、従って兵隊の生活でつらい耐えられないと言うようなことはなく、内地の生活とたいした違いはありませんでした。

夏は暑く冬は極端に寒く、凍傷患者もあるが、

体質でかかりやすい人もあり、かかっても極めて軽い者もいる。私は後者で、かかっても医務室で軟膏を塗り、手をこする程度で済んでしまう。

部隊の北四キロ位のところに小高い山があり、中山と呼んでいました。そこに一五センチ榴弾砲の弾二個が一梱包の木箱に収められたのが、トラックで中山の地下壕に運び込まれ数十日ほどその使役にいった。中山の五個位ある地下入口へトラックが弾薬を積んだまま入って行くのである。中は左右に穴が掘られトラックはそこまで行くのである。そこはまた穴が掘られ木枠で丈夫な柵が設けてあって、そこに格納する。

話によると五年は戦って撃ちきれないほど貯蔵してあるのだと聞いた。山頂にはトーチカが三つあって砲が据えられている。昭和二十年八月初旬「ソ軍」侵入の折、逸速く関東軍撤退とか、あの弾薬を撃たなかったのは惜しい気がしてならない。

除隊する頃、甲府市出身の満軍大尉の雨宮様が、

満州に残り食糧公社の仕事をしないかとすすめられたが、手に職もあり、洋服屋も結構忙しいと兄にも言われたので帰ることにした。

軍隊のことと言われても、除隊後すでに六十五年、その上、軍隊生活の多くは事務室勤務、公用外出して洋服仕立、縫製の仕事が多く、軍隊生活と言うても特異で、まあ楽をしました。

満州の思い出としては、春の訪れは遅く、五月末に花樹に一勢に花が咲く。夏は酷暑四〇度に達する。短期間に野菜、根菜、果樹が成育し結実する。夏野菜の代表格の西瓜、トマトの成育は早く、しかも大玉である。大豆畑家は一望千里、小麦の収穫にコンバインが使われ、大豆畑家の耕耘にはトラクターが使用されるなど農業の機械化が進んでいる点もあり驚いた。内地では馬に鋤を曳かせて田を耕していたから進んでいるなと感じた。

あんなに寒いところで夏が短いのに蛇の大きいものにも驚いた。長さ二メートル、太さは手首程もある。青光りして気味悪い。川岸の草むらを素

早く滑るがごとく動く様は異様である。餌となる蛙や野ネズミが多いためか。

そうそう満軍雨宮大尉に除隊後、公社入りをすすめられて、そのまま満州に留まっていたら、三年後の八月「ソ軍」侵入でどんなことになったやら、人の運命岐れ目は誰にもわからない、むずかしい。

北満の春早々のころ山火事頻発す。山と云うても三メートル程の樹木があり満人は山火事の火で煙草に火をつけて吸い、消そうとはしない。時にノロ鹿が飛び出す。ノロ鹿を撃つが、命中してもすぐ斃れず、三、四十メートル先で倒れる。肉は淡白、焼いて食するが煮て食べたか憶えはない。満州の鳥は白く、豚は黒色。大工鉋は前に押して枝を削る。大豆はトラックでバラのまま積み込んできてそのままおろし野積みである。

雪は少なく、多くて三十センチの積雪。黒竜江岸やそれにそそぐ大小の川一帯はツンドラ地帯である。夏は草むらが水面の随所に浮いており、用

心して乗ると膝小僧まで没する沼地でそれが無限にある。黒竜江南岸一帯は数十キロにおよぶ。冬は朔風、シベリア嵐があり、草木は枯れて荒涼たり。

除隊後、洋服屋、六十歳頃から書道塾、その間国勢調査員等を勤め、その功績を認められて勲六等瑞宝章の榮譽にあずかる。振り返てまあまあ分相応と言えよう。